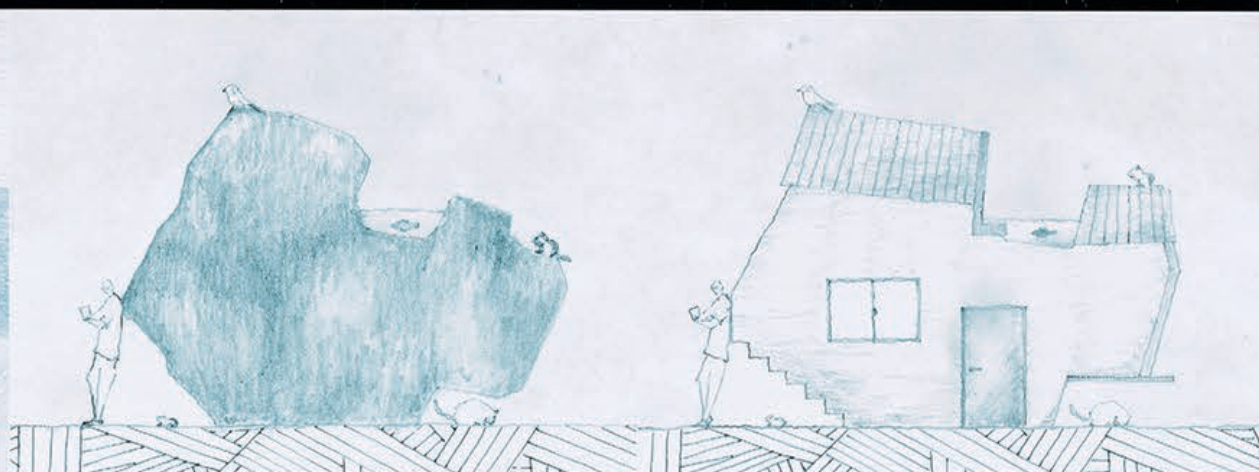
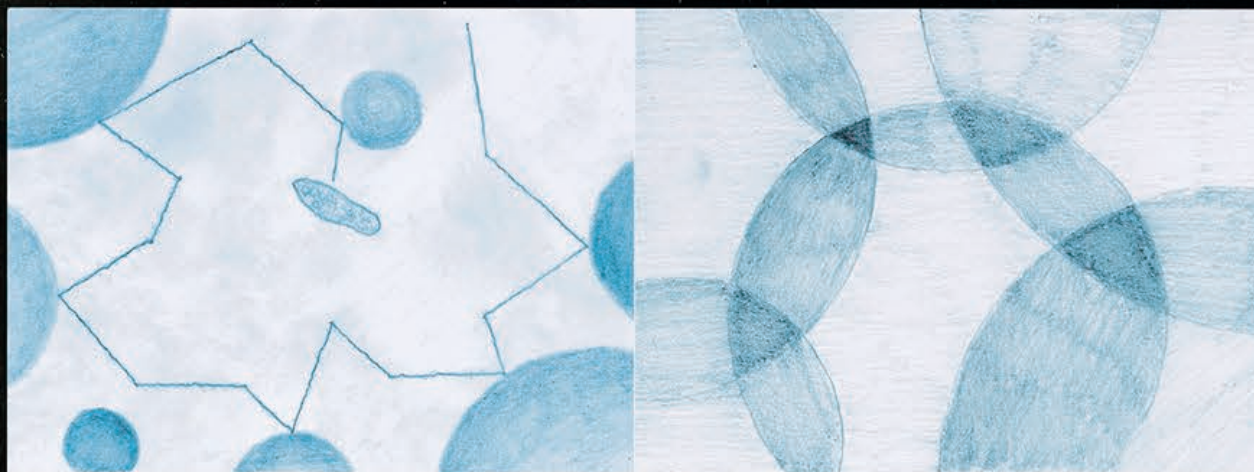
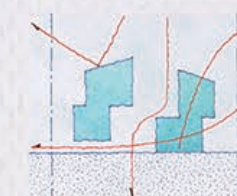




操作Ⅰ

「小さき他者」と
環境の循環をつくる



自然環境と生き物は常に大きなサイクルの中で動いています。雨水が溜まる場所や猫が通り抜けていく床下など、あらゆる動き＝「循環」を促す形態を建築に取り込んでいきます。敷地内そして周辺へと連続していく動きをつくり出す。

操作Ⅱ

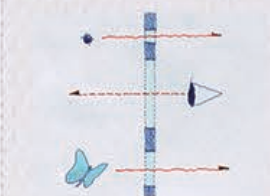
「小さき他者」の
居場所＝立体接地をつくる



敷地内に建築を置くと「小さき他者」たちの居場所がほとんどなくなってしまいます。この操作は建築が立体的に接地していくことで、彼らが求めている多様な環境を生み出すことを可能にします。

操作Ⅲ

「小さき他者」を
意識するスケールをつくる



「小さき他者」たちが見る世界に寄り添うことで、この建築は人間が住むだけのものではなくなります。彼らにとっての何かとなるスケールを建築空間に応用していきます。それは人間にとっても空間の「見え方」が変わるはずです。

1. 現代建築による人の生活はゾウリンシのように単純です。ゾウリンシは前進してぶつかれば方向転換し、それを繰り返すことで食物にたどり着きます。人も同じように、起きて仕事に出かけ食事をし、帰宅し、夜に眠ることを繰り返します。自分の環世界のみで完結した、単純なものです。

2. それは建築が人の住むことのために作られているからなのではないでしょうか。かつての生活は人だけではなく、周囲の環境や生命と共存することで豊かな生活を送っていました。この提案では、それら「小さき他者」と出会って共存することで、生活感覚を変える集合住宅を提案します。

3. そんな現代建築を再考するには建築が「人の住処」であることを辞めなければなりません。それは建築が自然界にあるような、水・波・草・岩・藻・泥の互いに共鳴しあっている空間に溶け込んでいくことです。そこには人と人との関係だけではなく、他者への愛があります。

4. 「小さき他者」から見た世界によって建築を構成していきます。こうしてできた建築はたくさんの環世界と繋がっています。居住者が彼らに気付いた時、彼らにとってはもはや生活する場所ではなく、真に生きる場所となるはずです。ここで過ごす人々もまた「小さき他者」なのではないでしょうか。

せかい 「小さき他者との建築」

